

文化庁委託事業
「平成 25 年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

平成 25 年度
江戸系あやつり人形 結城座
人形遣い体験育成入門 報告書



開講にあたって

結城座はお蔭様で、今年創立３８０周年を迎えました。

約四世紀という長い時の流れの中で、この“江戸糸あやつり”という日本人独特の感性が生み出した繊細かつ、しなやかな強さを持った芸能は、多くの民衆に愛され続けてきました。沢山の人形遣いたちが芸を磨き、しのぎを削り合いながら試行錯誤を重ね、人形の仕組みや技術も熟成されながら、現在の私達の時代へと伝えられてきたのです。

今私達が思う事は、この小さな一座がなんと多くの人達に支えられ存在しているかという驚きと喜び、そして四世紀にわたり人々を強く魅きつけ、その心を豊かにして、人と人との結び付けてきた“江戸糸あやつり人形”の持つ素晴らしい力です。

結城座は、この“江戸糸あやつり”の絆を更に未来へとつなげてゆく為、平成２３年度より文化庁の委託を受けて、小金井の稽古場での人形遣い入門塾をスタートさせました。優れた後継者を見出し、同時に多くの人々にその魅力を実体験して頂きたいと考え取り組んだ入門塾も、今回で第三回目となりました。

今年度も又、私達の活動にご賛同下さる各界の実力者の方々が特別講師を勤めて下さり、皆様ご多忙な中、塾生に手とり足とりの熱心な講座を行って下さいました。通常ではとても体験できない素晴らしい授業に、塾生達の人形への意欲もより一層深まりました。

こうして各界の皆様のお力添えにより、今年度も大変充実した入門塾になりました事、座員一同心より御礼申し上げます。今後も未来に向けてこの“江戸糸あやつり”という日本の貴重な芸能を伝える為、より一層努力をして参りたいと思います。

結城座



目次

開講にあたって	1
全体の講義概要	3
人形実技（結城座 人形遣い一同）	4～10
日本舞踊（西川右近 先生 西川鯉之祐 先生 西川貴美子 先生）	11
古典の台詞（澤村藤十郎 先生）	12
長唄（今藤政太郎 先生）	13～14
鳴物（田中傳次郎 先生）	15
演劇史（大笹吉雄 先生）	16
芝居の作り方（加藤直 先生）	17
読む、語る、歌う（大石哲史 先生）	18
受講生のアンケートより	19
人形実技の講義を終えて（結城孫三郎 結城千恵）	20
最後に	21

全体の講義概要

●実施期間 平成25年7月～平成26年2月

●授業日 月・水・土曜日

(人形実技120分＝1コマ その他の特別講義90～120分＝1コマ)

●参加者数 13名 (女性12名 男性1名／20代 5名 40代 2名

50代 1名 60代 5名)

●講座一覧

科目	講師	授業数
人形実技 (実習を含む)	結城座人形遣い一同	86コマ
日本舞踊	西川右近 西川鯉之祐 西川貴美子	6コマ
古典の台詞	澤村藤十郎	2コマ
長唄	今藤政太郎	3コマ
鳴物	田中傳次郎	3コマ
演劇史	大笹吉雄	2コマ
芝居作り	加藤直	5コマ
読む、語る、歌う	大石哲史	4コマ

●実習

平成26年9月 古典公演「三番叟」「釣女」(於 く にたち市民芸術小ホール)
公演見学

平成26年1月 「小金井市伝統文化フェスタ in お正月」
(於 小金井市市民交流センター) 公演見学

平成26年2月 「芝浜の革財布」(於 武蔵野芸能劇場) ゲネプロ見学

平成26年2月 成果発表会「文七元結」(於 結城座稽古場) 出演 裏方

人形実技 (86 コマ)

講師：結城座人形遣い一同

●開講式

座長の結城孫三郎の挨拶、及び結城座人形遣いと塾生の自己紹介の後、結城座の歴史や江戸糸あやつり人形の仕組み、遣い方の解説を受ける。そして日本の正しいお辞儀の仕方を教わり、「よろしくお願いします」と始まりの挨拶をして、人形実技の授業に入る。

各々の身長に合う糸の長さの人形を受け取り、操作盤である手板の持ち方、使い手の姿勢を教わる。手板を水平に持ち、しっかりと人形を立たせる。人形がしっかりと立っているかいないかということは、目で見るとはではなく、人形の足の裏から糸を伝ってくる手板の感覚で覚える。

最後に人形掛けに正しく人形を掛け、「ありがとうございました」と挨拶をして初日を終えた。

結城座の歴史と人形の解説を受ける



手板を水平にして人形を立たせる
手板を持つ左手で人形の足の裏を感じる

●7月（足踏み、足踏み前進、様々な糸の付いている位置を覚える）

手板を水平に持ち、たたらという棒に付いた膝の糸を上下させて足踏みをする。人形が浮いたり沈んだりしないよう、常に適切で良い高さを維持することが難しい。また、足踏みで人形の片膝を上げた時、左膝と右膝が同じ高さになるように遣う。この足踏みは徹底的に稽古する。

また、人形を遣う姿勢も矯正する。骨盤を立て、お腹を突き出さず、膝を緩め、重心はつま先へかける。上半身は力を抜き、遣い手の身体と手板の間には適度な空間を作る。糸や手板を持つ際は力まず、自然な流れの中で美しく持つ。

次に、足踏みで前進させる。前進する人形の後をついていくように遣い手が進む。主体である人形と、遣い手である人形遣いの距離や速度のバランスをとることが難しい。人形遣いの僅かな身体の動きが、人形に大きな影響を与えてしまう。人形と人形遣いのよい関係性を、常に自分の人形を確認しながら身に付けていく。

並行して、手板のどこに何の糸が付いているのか、どのように遣うのかを少しずつ学ぶ。



人形を持たずに、人形遣いの腰が上下したり左右に振れないよう進む稽古。 unnecessary 腰の揺れは人形に増幅して伝わってしまう。



足踏みで前進させる。はじめは恐る恐る。手板は水平に、一定の高さを保って、左右の膝のバランスは良いか、遣う姿勢・人形との距離など、様々なことに気をを使う。

●8月（息を合わせる、重心を意識する）

基本の足踏み、足踏み前進を忠実に稽古しつつ、様々な場面を設定して遣う稽古を進める。他の人と一列に足並みを揃え、息を合わせて前進したり、お互いにぶつからない様にすれ違ったり、大笑いしながら・泣きながら等、感情を表しながら遣ったり、人形で芝居をするということを少しずつ意識していく。

また、人形の体重と重心（体重がどこに乗っているのか）を感じることも大きな課題となる。起立の姿勢から右足を上げようとするすると重心はどこへ移動するのか、飛び跳ねるにはどのようなバネが必要で、どのような跳び上がり方ならどのようなスピードでどこまで跳べるのか等、人形の体重を感じ、人形が超自然的にならないように遣う稽古をする。



人形の足を繋いで二人三脚、四人五脚、最後は全員繋いで前進。全員の息が合わないと進めません。



片足を上げた時の重心はどこに行くのか

●9～10月（小走り、体重移動、方向転換、頭の操作、人形に洋服を着せる）

少し早い速度で前進、小走りする稽古を始める。スピードが早くなると思うとどうしても慌ててしまい、人形と人形遣いの関係が崩れ、手板を水平に保てなくなったりする。何度も稽古し、感覚をつかむ。また「歩く」に繋がる稽古として、片足を踏み出してもう片方の足を引きつける体重移動の稽古も始める。

これまでの稽古は前進することが主だったが、振り返るなどの素早い方向転換も稽古し始める。人形がブレないように、人形遣いの身体を捌かなければならない。

並行して、顔を横へ動かす糸を遣う稽古にも重点を置く。日本特有の仕組みをもった糸で、手板を持った左手で操作しなければならいため非常に難しいが、表現にあたり重要であるため、少しずつ稽古を重ねる。

9月の3日間をとって、人形に洋服を着せていく過程を学んだ。自ら人形に糸をつけていくことによって、人形の構造を理解することができたのではないかな。



●11月（片膝をつく、座る、）

2月に行う発表会の演目が決まり、より実践的な稽古を始める。これまで行ってきた稽古も繰り返しつつ、新たに「片膝をつく」「座る」といった遣い方を学ぶ。両膝の糸を調整し、手板の動きと合わせて操る。芝居の中ですぐ座ることができるようにしなければならない。手板を持つ左手と糸を持つ右手から伝わる感覚を受け取ることができるよう、神経を集中させる。その感覚から、自分の人形がどのような状態なのか、想像できるようになりたい。



●11月～2月（発表会に向けての稽古、舞台セット制作、お辞儀をする）

発表会の演目「文七元結」に向けての稽古が本格的に始まる。台本の読み合わせ、立ち稽古の他に、自分たちで舞台セットも考案し、制作した。



舞台を飾る布に、水の流れるイメージを描く。



こちらは出道具の屏風を制作している様子。
裏表で異なる紙を貼り、
裏返すことで場替わりができるようにした。



配役が決まり、読み合わせに入る。

はじめは、早口になるところ、訛りが出るところ等を指摘される。人形芝居で重要であるのは、人形を通して台詞を伝えることと、人形の動き・人形を遣う間を想定すること。芝居は自分ひとりではなく、相手役をよく見て感じ、相手役とのやりとりから生まれる気持ちを台詞として発する。他にも、古典特有の台詞回しの解説も交えながら、台本を読み込んでいく。

制作した舞台セットを飾り、本番用の人形に持ち替え、立ち稽古に入る。これまでに身に付けた基本稽古を土台にして、芝居をするための細かな遣い方を実践的に稽古する。女形の人形も登場するため、女形の遣い方も学ぶ。芝居の流れの中で、視線がどこにあり、どのような反応をしているのか、人形と人形遣いの関係性は良いか等、台詞を言いながら組み立てていかなければいけない。求められるものが大きく、初めはどうしたらよいか分からない様子の塾生も、一回一回の稽古を真摯に取り組み、少しずつ芝居を作っていった。



立ち稽古と平行して、合間に基本稽古を行う。芝居の中で何度もする「お辞儀」。右手で一度に何本もの糸を遣わなくてはならない上に、手板の動きも加わり、大変難しい。座って手をついてお辞儀をする、という一連の流れを芝居の中で行うことができるよう、何度も稽古する。

発表会に向けて、芝居の稽古の他に、舞台セット制作から舞台転換、舞台転換の打合せ、小道具の介錯、チラシづくり、舞台の仕込み等々、多くのことを塾生同士で話し合い、協力して進めた。

また外部講師による特別講義から学んだことや、経験したこと、塾生同士で共有した時間が、実際に芝居を作っていくうえでの大きな助けになっていた。

●2月23日(日) 成果発表会「文七元結」



左) 本番前最後の稽古、照明も入っていいよ大詰。
上左) 手作りのチラシでお客様を迎える。
上右) たくさんのお客様にご来場頂きました。



「文七元結」四幕より



組み立てた舞台をバラし、12代目孫三郎から修了証書を授与。年代も性別も異なる13人で、力を合わせて8ヶ月間を完走しました。最後は持ち寄りで打上げも。お疲れ様でした。

特別講義 日本舞踊（6コマ）

講師：西川右近 先生 西川鯉之祐 先生 西川貴美子 先生

● 講義を終えて

人形で芝居をする為に必要な要素の一つとして、日本舞踊を学んで頂きました。立ち座りやお辞儀、摺り足の仕方などの所作の基本を通じて、舞台上で無駄なく美しく動くことを、「男の踊り」「女の踊り」の双方を学ぶことを通じ、役の違いにより「気持ちの入れ方」「体のつかい方」「間のとり方」がどのように変わるかということ、会得まではいかなくとも、感じ取って頂けたのではないかと思います。人形を扱うだけでなく、介錯や舞台転換等の動きにも、役立てていただけたと思いますので、舞台に立つ為に活かせるものを意識しながらお稽古を続け、この体験をもとに表現を深めて下さい。（西川鯉之祐）

● 講義概要

着物の着方・扇子の扱い・摺り足・立ち座り・正座・お辞儀の仕方から始め、女の踊りとして「梅にも春」男の踊りとして「寿」を指導して頂いた。

- 第一回 着物の着方・所作の基本・扇子の扱いを学ぶ 「梅にも春」
- 第二回 お辞儀の仕方・首振り・向きの変え方・おすべり等を丁寧に復習 「梅にも春」
- 第三回 気持ちを持って踊る・お客様に対する向きを意識する 「梅にも春」
- 第四回 「梅にも春」のおさらい 男おどりの基本を学ぶ 「寿」
- 第五回 男の構え・股割り・肘張り・胸張りを復習「寿」
気持ちを女に切り替えて「梅にも春」の復習
- 第六回 「梅にも春」「寿」 お祝い 細かく手順を追いながら復習



特別講義 古典の台詞（2コマ）

講師：澤村藤十郎 先生

● 講義を終えて

つなぎの間ではなく、魔物の魔であるというお芝居と、古典台詞のお勉強を致しました。生徒さんは、メモをとりながら真剣にお話を聞いて下さいました。終ってからたくさんの質問があり、また、いつでも知っている事はお教えしますとこの回をべました。結城座の皆様、生徒の皆様、ありがとうございました。（澤村藤十郎）

● 講義概要

岡本綺堂作「修善寺物語」をテキストとして、古典の台詞を声に出すことに挑戦した。作品や役に関する解説や先生のお手本を聞きながら、作品を通して流れる“岡本綺堂調”といえる台詞のリズムを大切に台詞を言うことを一つの目標に取り組んだ。

感情を込めつつも、作者のリズムを壊さないように、人の芝居の邪魔にならないように台詞を読むということ、“岡本綺堂調”があることと同じく“鶴屋南北調”など色々なリズムがあること、「間」について、毎日が初日であること、何かを克服するためには「稽古」しかないこと、何より自分が楽しく稽古に励むこと、等、古典の台詞を読むことに限らず、舞台に立つうえで非常に大事なことを教えて頂いた。



特別講義 長唄（3コマ）

講師：今藤政太郎 先生

● 講義を終えて

昨年9月28日、10月2日、10月16日の三日間にわたり、結城座入門塾・特別講義にて長唄を通しての日本音楽、更には日本文化について、お話をさせて頂いた。

長唄といっても受講者用の楽器もなく、さりとて長唄について実技らしきものを少しも取り入れないのでは受講者の達成感も乏しいと思い、色々考えた末、エアーギターならぬエアー三味線を教えることにした。

70～80cmの棒を受講者の分用意してもらい、それを三味線に見立て、我々が三味線を弾く形を覚えてもらった（その形をすることを我々は“構え”と言っている）。左手で棒を三味線を弾くような形で構えてもらい、右手に鉛筆などを撥に見立てて持ち、まず、リズムをとる練習を試みた。

さらに、日本古謡『さくらさくら』の譜面を配り、受講者と共に唄い、撥に見立てた鉛筆をスウィングさせて『さくらさくら』のリズムを打ってみた。次に講師が三味線で『さくらさくら』を演奏し、左手の運指をゆっくり見せて繰り返し繰り返し真似をしてもらった。やがてそれが出来るようになってから、右手と左手をシンクロさせて、やってもらったが、これは中々難しいようであった。しかし、どうにか出来るようになると、受講者は、それなりの達成感を得られたようであった。

次に、『さくらさくら』を日本独自の唱歌（しょうが）付きで聴いてもらい、エアー三味線に唱歌をつけてやってもらった。

その折、何故日本では音楽を唱歌という技法で唄い伝えられたのか、その背景には日本語の中に豊富に存在する擬態語・擬音語（オノマトペというものか）があるのではないかと、という説明をした。そして受講者に「なぜ日本にはオノマトペが多いのか？」という問いかけをした。それについての積極的な反応はなかったように思うが、中には興味を持って、色々考えてみる、という受講者がいたのは収穫であった。

日本の美しい文化の一つに「みなし」「見立て」「聞きなし」がある。例えば桜の散る様を桜吹雪と言ったり、雪の降る様を風花と言ったりするなど沢山ある。鶯の声を「法法華経」と聞きなしたり、きりぎりす（今のコオロギのことか）の声に至っては「綴れさせほせ」になってしまったりする。荒唐無稽のようでありながら、日本の美しいさまのシンボルのような気がする。という話をした時に、受講者から共感を得られたように思う。ひとしきり、口三味線からオノマトペの話になり、「見立て」「聞きなし」「等の文化の話に及んで受講者と心が通った時が持てたように思う。

また、我々は実技者なので文化を語るだけでなく、長唄の一部をほんの少しでも唄ってもらいたいと思い、長唄『新曲浦島』の舟唄の部分（この部分は三味線の伴奏がなく唄のみで唄われる）を小分けにしながら少しずつ教えた。初めは遠慮がちにこわごわ声を出していた受講者が、次第に大きな声を出し、我々と合唱した時は教え甲斐を感じた。

次に、唄の専門家を招き、長唄の名曲、九代目杵屋六左衛門作曲『越後獅子』を抜粋で演奏したところ、拍手喝さいを受け、喜びを共にした。最後に政太郎自身の作曲による創作邦楽『雨』（井上ひさし原作、海津勝一郎脚色）をDVDにて鑑賞してもらった。この曲では雨の音を「ざんざん」「ざーざー」「しとしと」など、色々に表現していて、前に説明したオノマトペとの関

連を強調した曲であることを説明すると、演劇に興味を持っている多くの受講者は、大変興味を持たれたようだった。

短時間での講座で、十分な成果が得られたかどうかかわからないが、また機会があれば我々もさらに研究し、内容を深めていければと思っている。(今藤政太郎)

● 講義概要

歌舞伎と共に育った音楽である長唄について学ぶ。

第一回

三味線の組み立てや三本の糸、勘所とツボ等の説明をしていただく。三味線を初めて近くで見る塾生も多く、先生方の解説を熱心に聞いていた。オノマトペの一種だという口三味線を習い、オノマトペを詞に取り入れた「雨」(先生の作曲)を鑑賞した。

第二回

「さくらさくら」を口三味線で唄う。口三味線は三味線弾きが自然に感じ取った音の印象である。塾生一人一人、木の棒を三味線に見立てて持ち、エアー三味線で「さくらさくら」を弾いてみる。本物ではないものの、弦の押さえ方などを本格的に教えていただいた。

第三回

口三味線で「さくらさくら」を歌いながらエアー三味線を弾く。弦を押さえる左手と撥で弾く右手と口を連動させるのは難しい。また、本物の三味線をお借りして、一人一人実際に音を鳴らすという体験をさせていただいた。そして「新曲浦島」の舟唄を、先生のお手本を見本に真似ることに挑戦した。最後に、先生方の「越後獅子」の生演奏を聴かせていただき、目の前でプロの長唄を拝聴し、非常に貴重な体験が出来た。芝居と共にある長唄という音楽に、少しでも近づけたように感じる。



特別講義 鳴物（3コマ）

講師：田中傳次郎 先生

● 講義を終えて

本年も歌舞伎音楽の講義をさせていただきました。

「音から学ぶ表現」をテーマに歌舞伎で演奏される水の音や浪の音など様々な自然描写を大太鼓ひとつで演奏していただきました。

よく「師匠の芸を盗め」といいますが、これはとても大切な事で、一つ一つの動き(所作)や音の微妙な強弱、またそこから表現される情景や心理など深いところまで研究することが大事です。

また今回はお話も沢山させていただきました。歌舞伎界だけの問題ではない後継者不足、指導者不足、技術者不足というところや、次の世代が活躍できる環境作りなど色々あります。色々な方にご理解いただくことによって、この娯楽の世界というのは成り立つものだと思っております。（田中傳次郎）

● 講義概要

大太鼓を使用した表現を中心に、歌舞伎音楽について学ぶ。

第一回

様々な撥を見せて頂いたり、太鼓の皮の種類や歌舞伎音楽とは、といったお話を伺いながら、大太鼓で「水の音」を稽古する。技術よりも、役者の動きや風景、心理を想像しながら打っているかを重視し、“感性”を磨くことを意識して取り組んだ。

第二回

川の音、波の音、風の音、雨の音、雷の音、滝の音、山おろし、といった自然描写と、三つ太鼓について学んだ。同じ風の音でも、状況によって表現は様々に変わり、先生が打ってくださるその変幻自在な音からは、舞台の情景を鮮やかに思い描くことができた。実際に打って見ると、もちろん全く出来ず、情景を思い描きながら打つことも難しい。見て真似ることの難しさを痛感した。

第三回

鳴物は演技に音を付ける仕事、というお話から、雪の音、雪崩、さざ波、ドロドロ、儀式音楽の一番太鼓や打ち出しについて学んだ。また、歌舞伎音楽に不可欠な“かけ声”も聞かせていただき、その迫力に圧倒された。伝統芸能を継承する上での心構えや、稽古への取り組み方、現状の課題等々のお話も聞かせていただいた。後日、発表会「文七元結」の稽古で音が入った際、塾生達は、聞こえる太鼓の音が「水の音」とであると理解でき、情景をより深く想像することができたようだ。



特別講義 演劇史 (2コマ)

講師：大笹吉雄 先生

● 講義を終えて

「日本の演劇史」という講座を二コマ担当しました。とはいえ、この時間内で全てをお話するのは不可能ですから、日本の演劇の特色ということを中心にお話を進めました。演劇の場も、明治時代を境に前近代と近代とに分かれること、前近代の演劇としての能狂言と人形浄瑠璃と歌舞伎の共通項とそのあり方、近代に誕生した新劇の特色とそのあり方を比較しながら、全体として日本の演劇の地図が理解できることを講義の目的にしました。

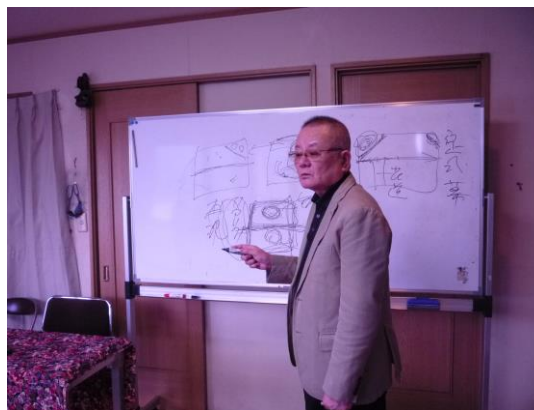
できるだけ広い範囲のエピソードを紹介して、受講生の関心を引くことに重点を置きましたが、視聴覚資料を使わない言葉だけの講義だったにもかかわらず、熱心に耳を傾けてくれました。講義を終えた後の質疑応答も、活発だったと思います。受講生の質がよかったのでしょう。世代的にも二十代から六十代まで、相当の広がりがありました。ただ、十数人の受講生中、男性の参加が一人だったのは、やや残念でした。今回に限らず、こういう講義の一般的な傾向ですが、男性の参加をどう促すか、共通の課題ではないでしょうか。三時間も話しつづけることは普段ありませんので、途中、ちょっと疲れを覚えました。が、終わってみれば、その疲労は快感にかわっていました。(大笹吉雄)

● 講義概要

日本の演劇について、前近代の古典芸能と近代の演劇の特色を学んだ。前近代の演劇を特徴付ける劇場の様式や、俳優の制度や身分、近代になって出現する「リアリズム」からの女優の存在、演出という言葉や照明・衣装・美術など、現代では当たり前にある役割が大正期以降に作られていったことなどを具体的人名や団体、制度を交えて解説していただいた。

時代の流れと共に、活動弁士、喜劇や家庭小説が出現することは、必然であったように感じられた。

また、戯曲と演劇を分けて考えた岸田國士を取り上げ、戯曲に書けないものをアンサンブルで作っていくのが演出家で、戯曲にかけないものを体現していくのが俳優である、という内容が印象的であった。塾生たちは各々活発に質問をし、体系的に演劇について知ることは、芝居をする上でも、見る上でも良い礎となった。



特別講義 芝居作り (5コマ)

講師：加藤直 先生

● 講義を終えて

結城座と人形を通して、これからの演劇や劇場のことを考えるのは大変楽しい。それで結城座のワークショップに集まる人たちと、素朴に実感的に、時間を共にする訳です。

折口信夫によると、柿本人麻呂はどうやら「遊部」と関係があるらしい。旅をしながらウタいながら生きる喜びと悲しみをヨム。「遊行」という言葉も忘れられて久しいが、語って歌って演じながらあちこち歩く「芸能民」の力を、もう一度現代の劇場に連戻そうと、メンバーと試行錯誤しました。

● 講義概要

芸人が町にやってきて芝居をし、また去っていくという中世の芸能から、芸人よりもまず「劇場」が先に存在している現代で、劇場とは、表現とは、演劇とは何かを考える。

第一回

現在の劇場の在り方や規模、小劇場文化や資本主義、中世の芸能などについてお話を伺う。後半は3班に分かれて、「何かをしている（反応している）」瞬間を演じ、お互いにその内容を想像した。舞台装置がなくても、身体だけで演技できることや、観客は演者が意図しないことをどんどん想像していくこと、小さな目の動きにも注目して物語を作っていくことを学んだ。

第二回

自分の身体を知る、ということをテーマに、身体を使って「車輪」「ヨット」「汽車」などお題を表現する。3班に分かれ、話し合い、協力してお題を形作る。どのチームもシンプルで美しい形を作ったが、説明的になってしまうと観客の想像力が別の方へそれてしまう。

第三回

3班に分かれて“人形”と“他者”をキーワードに寸劇をつくる。各班での話し合いの後、前回同様、自分の身体を知るためのワークを行った。

第四回

遊び、想像力、レトリック、異化、見えるものと見えないもの、等を取り上げて表現について考える。その後、班に分かれて寸劇の打合せを行う。

第五回

打合せとリハーサルの後、寸劇の発表。各々の芝居を見て、感想を出し合った。観客に伝えたいが故に伝え易くしてしまう説明的な表現について、人によって異なる日常・常識について等、観客の注目や想像力がどのように働くのかを考え話し合った。



特別講義 読む、語る、歌う（4コマ）

講師：大石哲史 先生

● 講義を終えて

昨年に比べて、声を出す事、歌う事への興味がかなりもてるようになってきました。

ただ、まだまだ自分の声がどのように出ているのか、または他人に聞こえている声がどんな風になっているのか、という耳はまだまだ成長していない気がします。慣れと興味を増やしていきましょう。

● 講義概要

先生の指導に導かれるように、声を出し、自分の声に耳を傾け、人に聞いてもらうことに挑戦した。一貫して、自分の中に生まれる感情の発露としての歌となることを目指した。

第一回

はじめに、言葉を発することに不安があるか、あるとしたら何故あるのかを考え、意図したことを言葉として発して伝えるということを、話すことで行った。声を出しやすくするために体を動かして（こんにやく体操）、力を抜くことを意識した。「あまんじゃくとうりこひめ」の台詞を声にしながらかく。台詞の感情と自然な足運び、台詞の間のバランスを取る。

第二回

はじめに、こんにやく体操を指導していただく。一人一人に声の出し方をアドバイスして頂きながら、「あまんじゃくとうりこひめ」を男性・女性パートに分けて歌ってみた。喉を痛めない声の出し方として、口を尖らせて声帯から離して声を出したり、歯を閉じて歯の裏に響かせながら声を出してみる。また、口を大きく開ければ大きな声が出るわけではないということで、口を動かさない様に歌ってみたり、普通に声を出すことでは気づかない仕組みや音の響きを体験した。

第三回

課題曲「舟のうた」「舟唄」「やさしかったひとに」の稽古。歌詞を台詞で言ってみて、自分の心の通りに、歌詞をメロディにのせて歌う。言葉の気持ち、歌詞の人物がどのような人物なのか、想像してその気持ちになるということが、メロディに言葉をのせる以前に一番重要であるということを学ぶ。

第四回

「あまんじゃくとうりこひめ」後半部分を、歌詞に合わせて体を動かし、その体の動きから歌を作ること学ぶ。また、間奏に込められた意味を想像して理解することも。登場人物の掛け合いのところでは、相手の存在をよく意識して歌う。課題曲を一人一人発表。



受講生のアンケートより

人形実技の講座について

- ・先生方の各塾生への細かい目配りによる授業を受けられ、その都度励みになりました。(60 代女性)
- ・とても楽しい経験でした。何も出来ない状態から、足が動き、手が動き、頭が動き、すべてが驚きでした。(60 代女性)
- ・実際に試みて皆についていくので精一杯でした。実技がもう少しあるとよいと思いました。(60 代女性)
- ・入門塾が開講して一ヶ月ほどは特にこまめに休憩時間を設けていただき、無理のない範囲でやっていけるような心遣いをしていただき、ありがたかった。また、その日の講義でつまづくと、次の講義の際に改善策を改めて提示していただくような、一人一人に向き合った形での指導をいただけた。文七の稽古の際は、アマチュアの我々にも真剣に接していただき、感動した。(20 代女性)
- ・人形の糸を一度全て取り、付け直した授業は人形の仕組みを知ることが出来、良かったです。(20 代女性)

外部講師の方による特別講座について

- ・講師陣が一流の方ばかりで驚きました。日本の伝統芸能や演劇について存分に体験して学べる素晴らしい講義の数々でした。(20 代女性)
- ・ふだん、あまりふれることのない古典、しかも一流の講師陣の特別講義はバラエティに富み、人形とは別の貴重な体験ができました。(60 代女性)
- ・普通ならお会いできない方々にお会いして、たくさんお話を伺うことが出来ました。塾生の方々もやる気満々で、質問が止まらず時間オーバーすることがよくある程、熱気がありました。(50 代女性)

講座の曜日、時間帯、回数などについて

- ・週 3 回は大変でしたが、これだけ多くのことを学ぶためには必要な回数だと思います。(20 代女性)
- ・ほぼ一日おきはちょっと大変かなと思いましたが、すぐに慣れました。慣れると一週間稽古が無いと不安になるので不思議です。後半は二時間はあっという間で少々物足りない思うようになりました。(50 代女性)
- ・平日は仕事を 17 時半に終えてから塾に通っていたので 19 時開始はぎりぎりちょうど良かったです。(20 代女性)
- ・平日昼コース・夜コース選択可+土曜合同コース等があればありがたい。(40 代女性)
- ・私にとっては大変ハードでしたが、他の方は休まず来られているので、良かったのかと思います。(60 代男性)

入門塾全体について

- ・あやつり人形、結城座について何も解らず入門してしまいました。私の今までの生活と違い戸惑いも多々ありましたが、先生方、又塾生の方々に支えられ楽しく過ごすことができました。(60 代女性)
- ・人形の動きもままならなければ自分の身体のコントロールもままならず、まるで片手に割ってはいけない卵を持ちながら、反対の手では全力で釘を打っているような複雑さで、一カ所だけに集中しては決してうまくいかない、そこに離れがたい魅力を感じました。最後の発表会に向けて塾生同士のチームワークも深まり、猛暑も雪も乗り越えて素晴らしい日々を過ごせました。(20 代女性)
- ・各先生方の人形に対する熱意を強く感じての日々の受講はとても身の引き締まる思いでした今回の入塾により“糸あやつり人形”を知ることが出来た事は、私にとって一番の収穫であり、喜びです。又、本格的な卒業発表会をやらせて頂き、塾生全員がまとまってより深く仲間意識を持って取り組めたことは嬉しい限りです。(60 代女性)
- ・以前よりも自分を客観的に見られるようになった気がします。(20 代女性)
- ・正直くじけそうになったことは何度もありましたが、先生方の熱心な指導と周りの仲間の真剣に取り組む姿をみて、自分も頑張らないと励まされ、7 ヶ月間を終えることが出来ました。(20 代女性)
- ・「出来なくたって良いんだ。無駄にはならないから。」と本当にたくさんの事を教えて頂きました。目の前でプロの人形遣いの技を沢山見ることが出来るのは、塾生だけの特権ですね。(50 代女性)

人形実技の講義を終えて

今年の生徒達には、残念ながら結城座の自主公演に参加させる事が出来ませんでした。その為、前期の段階で生徒達の卒業公演には難しい作品を選ぼうと考えていました。題材は、古典の「文七元結」。この作品は、一時間以上の大物です。無理を承知で選んだのです。

二十五年の十月ごろには発表しました。まだ基本訓練もクリアーしていない段階でした。七月が開講でしたから、しつこいほど足踏みを繰り返させたり、人形の糸を覚えさせたり、頭を動かさせたり、人形の目線のダメを出したり、息づかいの糸を使わせたり。糸を使おうとすると手板（操作板）のバランスがくずれるなど……。一步進んだかなと思っていると元に戻るという事の繰り返しの真只中でした。

こんな調子で四場もある芝居「文七元結」が出来るのか？結城座の座員からかなり心配の声が上がっていましたし、私自身も心配で仕方ありませんでした。

しかし、私の中には人形の表現は、その作品の中にドップリ首まで浸かってみなければ教えられる事が山ほど有ると私自身が信じているものですから、無理やり様々なことを突っ込んでいきました。役振りには、個々の人達に差を作る事を嫌い、クジ引きにしました。生徒の年齢は、二十歳から七十歳近い人迄がいます。そんな年の差は、無視をしました。さらに舞台美術、舞台作り、パンフレット、タイムテーブルも全て生徒達にまかせ、劇団員は、舞台上の演技だけを指導するという事にしましたのです。ただ、本番の照明・音響だけは、劇団員があたりました。

今回の生徒達は、まれにみる真面目さと、努力を日々重ねていきました。本番直前の稽古日が大雪となり、休みが多いのではないかと思います。稽古場に行くと、生徒達が、稽古場前の道路の雪かきをしていました。雪で電車やバスが大幅に遅れたにもかかわらず、一時間も二時間もかけて歩いて来る生徒達もいました。そんな生徒達が作る舞台がつまらないわけはありません……。人形や台詞が覚えなくても、熱い卒業公演になった事は、言うまでもなく、彼らと共通した時間を持てた事は、私にとっても貴重な体験でした。

十二代目 結城孫三郎

私は4人兄妹の末っ子として生まれました。兄の中には、お前は失敗作だったとからかう人もいました。確かに私は本名が千恵であるのに、両親はすっかり忘れて千恵子と呼んでいたのです。そんなスットンキョな家庭に育ちながら、自分の登録している名前が千恵である事を知った時、新たな自我が目覚めたのかもしれませんが。それから何10年もたった現在まで、自分の知識のなさ、至らなさ、体調の悪さなど負のどん底に落ちた日までも、いつも心の支えになっていたものは舞台なのです。人形を遣っていたからこそ今まで生きて来られたと思います。

この糸あやつり人形の持つ素晴らしい世界を、そして先人達への感謝の気持も含めて、皆さんに少しでも知ってもらいたいといった思いで塾生と対峙しておりました。その思いが今期の様に結実出来た理由は、たった一言です。塾生が真面目であったという事。生きる事をこんなにも積極的に、真摯に、その上楽しむ事を知っている人達と、共に時間を過ごせた喜びは何よりも大きな御褒美です。彼等の透き通った眼差しに反射する自分自身を見るにつけ、失敗作だったかなァと考える事も多々ありますが、まだまだ、答えを出すには早すぎます。皆の信頼を裏切らぬ様、私自身の目が濁らぬ様、気合を入れて前進して行かねばなりません。

と云う事で塾生の皆さんの名前を覚えられなかった事は悪意でもなく、私自身がスットンキョであった訳です。人間不信の世の中で、手離しに心を開いて如何なものかとも自身考えるのですが、塾生の皆に幸あれと祈る気持ちに間違いはありません。

結城千恵

最後に

いつもの事ながら、塾生を前にして彼等が何を求めているのか考える。今回はそれに加えて20歳代から60歳代までの絶妙の構成で、その上何故か男性はたった一人であった。このようなバラバラの人達を一人も欠ける事なく今期を終えたいという、座にとっても新しい挑戦であった。始まってみると驚きの連続である。彼等は、自分の知らない世界に対して実に貪欲であり、何よりも真面目であったのだ。肉体の発見から始まる細々とした要求や質問に、最初はボカンとしながらも一生懸命ついてくる。では、人形ではどんな表現方法があるのか——ここからが耐え忍ぶポイントなのだ。それぞれがフォームを覚え、それを崩す事なく糸の操作をするのは神経も肉体も共鳴を上げる作業といえる。手板と呼ばれる操作板を水平に3本の指で支え、脇を開け、脱力する事など、とても日常の中にはありえない事だ。普段使っていない筋力を目覚めさせるのは自分自身が歩き方を忘れてしまっているのを思い出すリハビリに等しい過酷な作業である。塾生達は苦しさを楽しさに変える術を身に付けていた。また、年齢、性別を越えてそれぞれの自然な居場所を見つけ、互いに支えあっていた。彼等を見ていると、より丁寧にあれもこれもお教えしてあげたいと欲が出る。互いの思いが卒業公演という形に治まった時、私達はとても誇らしい気持ちになった。もちろん、全員で迎えた最終日である。8ヶ月間本当にご苦労様でした。そして心からありがとうと伝えたい。

結城座



文化庁委託事業〔平成 25 年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業〕



主催:文化庁

公益財団法人 江戸糸あやつり人形 結城座

国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」 「東京都無形文化財」

〒184-0015 東京都小金井市貫井北町 3-18-2

TEL 042-322-9750

FAX 042-322-3976

Email info@youkiza.jp

<http://www.youkiza.jp/>

協賛: 東レ株式会社 東京コカ・コーラボトリング株式会社

印刷: 社会福祉法人 東村山けやき会 平成の里

結城庵

